プレート・テクトニクスに対する京大地質の対応

瀬戸口烈司

深田地質研究所

The activities for and against the plate tectonics in the Department of Geology of Kyoto University

SETOGUCHI Takeshi

Fukada Geological Institute

要旨：新しい地球観「プレート・テクトニクス」の受け入れをめぐって，1970 年代の日本の地球科学界はおおきくゆれた．英米ではその受容に 2 - 3 年ほどしかかからなかったが，日本では 10 年以上も要した．泊は，この実情を科学史の立場から解説した．地団研の影響が最大の要因，というのが泊の見解である．泊の主張は大筋では認められるが，京大地質は地団研の勢力下にあって教室全体がその受け入れを拒絶した，という記述は単純化しすぎていて，同意できない．京大地質にあって，地団研がもっとも勢力を拡大したときでも，全教官 17 名のうち，地団研プロパーはせいぜい 5 名にすぎなかった．教室内にあっては地団研のみが組織化に成功しており，反地団研はばらばらの個人に分散していた．相対的に地団研が圧倒的にまとまった勢力になっていたから，地団研の存在が目立っていたのであろう．実際には地団研の動きは京大地質のなかでも泊が想定したほどには強力ではなかった実情を，地団研と対立していた立場から述べる．

キーワード：プレート・テクトニクス，地学団体研究会（地団研），京大地質，日米科学，自由からの逃走

1. はじめに

泊次郎は『プレートテクトニクスの拒絶と受容ー戦後日本の地球科学史』を表し，日本でプレート・テクトニクスの受け入れが先進諸国に 10 年以上も遅れたことの原因を，科学史的見地から本格的に論じた.「革命」的な科学思考の受け入れには時間がかかるものだが，プレート・テクトニクスの受容については，英米などでは 2 - 3 年ほどしかかからなかった．日本ではなぜ 10 年以上も要したのか. それにはいくつかの原因があったが，戦後澎湃として興った研究民主化の波に乗じて発足した「地学団体研究会」（地団研）の影響が最大であった，というのが泊の主張である．

泊の著作は労作で，大筋においては私も彼の主張に賛同する．ただし，京都大学理学部地質学鉱物学教室（地鉱教室）が地団研の勢力下にあって，こぞってプレート・テクトニクス理論の受け入れを拒絶していたという記述には，同意できない．京都の地鉱教室の地団研の影響力は，泊が想定しているほどには，実際には強くなかったのである．

そのあたりの事情を，地団研との軋轢を体験

してきた側の立場から，資料として書き残しておきたい. 地団研の立場からは, 泊の論説には, とうぜん批判もあろう．ここでは，地団研と対立していた側の観点から，京都の地鉱教室の動きを述べることとする.

2. 地鉱教室の学生となる

私が京都大学に入学したのは 1962 年である. 工学部鉱山学科の学生であった．理学部に入学したのではない．工学部の方がかっこいい，という程度のミーハー的な発想が根底にあった. 学生団体としては「探検部」に所属した．数年前（実際に 1956 年）に創設された探検部が，学生でありながら海外で活動していることは, 知っていた．自分もそんなことをやりたいと思って，探検部に入ったのだった.

探検部に入って，探検部にとって地質学というのが重要な研究分野なのだということがわかってきた. 探検部の最初の海外遠征隊は 1956 年の「東ヒンズークシ学術調査隊」であるが, 隊長は地質学者の藤田和夫（大阪市立大学助教授）が務めている．藤田は京大の地鉱教室の出身者である．1957 年の「スワート・ヒンズークシ学術調査隊」は, やはり地質学者の松下進（京大地鉱教室教授）が務めている．1961 年の「ポルトガル領チモール学術調査隊」の隊長は中沢圭二（京大地鉱教室助教授）が務め，地鉱教室の学生の鈴木博之が隊員として参加している. 私が入学した 1962 年には, 大阪市大の探検部との合同で「カンボジャ学術調査隊」が派遣されているが，隊長は大阪市大助手の石井健一，副隊長は京大地鉱教室研究生の野上裕生が務め, ともに地質学者である.

1956 年に結成された探検部の初代プレジデント（探検部では学生のトップをリーダーとかキャプテンとはいわずに，プレジデントと称していた）には高谷好一が就任した．工学部電気工学科の学生である．高谷は，京大人文科学研究所（通称 “人文研”）の吉田光邦をかつぎだして，イランへの学術調査隊を成立させた．帰国後，高谷は理学部地鉱教室に転学部する．この高谷の行動が，私に影響を与えるのである.

2 回生だった 1963 年に, 探検部が推進していたニューギニア調査隊が成功する．企画の中心人物は 1960 年の「トンガ王国調査隊」に参加した経験のある石毛直道と鈴木博之であった. ニューギニアは巨大すぎるので，主催団体は京都大学生物誌研究会に移し替えられた．この団体は, 1955 年の「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術調査隊」の推進母体である. このニューギニア調査隊の正式名称は,「京都大学西イリアン学術調査隊予備踏査隊」という．この隊に, 私は最年少の立場で参加した．後援した朝日新聞社から本多勝一と藤木高嶺が派遣されてきて, ルポルタージュ『ニューギニア高地人』を出版した．本多たちの著作があまりに有名で，これが京都大学の調査隊だったことを知るひとは, ほとんどいない．本多は，1956 年に京大に探検部が設立されたときの立役者であった.

1964 年は 2 回目の 2 回生として過ごした. 京都大学に設置が決定した東南アジア研究センター（現在の東南アジア研究所の前身）はすでに動き出していたが，教官・事務組織は未整備のままだった．研究担当教官で探検部顧問の吉井良三（教養部教授）の口利きで，夏休みの 40 日間，私は同センターの事務のアルバイトをすることとなった．アメリカのフォード財団からの基金援助を母胎に京都大学に設立されることになった研究機関だが，フォード財団からの援助基金と同額の自己基金も蓄積することが求められていた．研究担当教官が大阪財界を中心に

募金にあたられた．その事務処理を中心に，各教官の研究室に書類などを届けなければならない．自転車で学内を走り回るのが私の役目であった. その過程で, いろんな先生方と知り合った.

しかし, いいことばかりではなかった. 当時, 私は工学部鉱山学科の 2 回生だった．まだ教養部に在籍の身で，学部の専門課程には進学していなかった．学部に進学するときには物理探査講座に行こうかなと考えていた．物理探査講座の主任教授も東南アジア研究センターの研究担当教官であった．その教授とも，とうぜん接触した．天皇のように権威があり過ぎる方で，学生の主体性などまったく認めないタイプの教官だと，私には映った．そんな人の講座に属する気持ちは萎えてしまい，高谷が歩んだ道を真剣に考えるようになった．そのころ出版された竹内均・上田誠也の『地球の科学』は，たいへん興味深く読んだ．地球科学のおもしろさがわかる気がして，地質学への転向の気持ちがつよくなった.

そして 3 回生になると同時に，理学部地質学鉱物学科に転学部した．地鉱教室が探検部にとって身近な存在であったことがおおきく作用した.

3. 人類学の勉強をはじめる

京都の探検界の大御所は今西錦司（京大“人文研”社会人類学部門教授）であるが，弟子の梅棹忠夫が探検部の顧問として，探検部の学生に多大の影響を与えていた．京大の理学部動物学教室には自然人類学講座があって，サル学の中心として活動を開始していたが，京大には文化人類学の講座は存在していなかった．そこで梅棹が中心となって 1964 年に京都大学人類学研究会（通称“近衛ロンド”）を発足させ，人類学の自主講座をはじめていた．この研究会は人類学の一大勢力に成長し，梅棹が中心となって 1974 年に設立された国立民族学博物館（通称“民博”）に，近衛ロンドの多くの会員が職を得て，文化人類学で「飯が食える」ようになった．探検部員で例を挙げると, 石毛直道, 松原正毅, 端信行，吉田集而，山本紀夫である．探検部員ではないが，近衛ロンドの会員で民博に就職した例はかなりの数にのぼる.

1965 年の 4 月から私は地鉱教室の学生となったが，同時に，近衛ロンドにも入会して人類学の勉強をはじめた．探検部の多くの仲間が人類学に傾倒していったことの影響をもろに受けたのだった．だから私は地質学の勉強と人類学の勉強を同時にスタートさせたのである．まったく内容のちがう，別々の学問領域のように映るが，後に京大霊長類研究所に職を得てサル類の古生物学的研究をはじめることで，両者は融合した．勉強に無駄はない，というのはこのようなことを指すのであろう.

4. 学生運動への興味の喪失

私が京大に入学したのは 1962 年である．60 年安保は高校時代にテレビで観ていた．当時京大に入学していたら，あるいは国会へのデモに参加していたかも知れない．62 年のときは，大学管理法をめぐって, 学内封鎖するかどうかで, 学内はおおいにゆれていた．学生，教官，職員を対象に，学内封鎖の是非を問う全学投票がおこなわれたが，総投票数が過半数に達せず，不成立に終わった．クラス討議もさかんにおこなわれ，その過程で日本共産党に直接の指導を受ける民主青年同盟（通称“民青”）とその他の全学連の各派との対立が深刻なことが，私にもわ

かるようになった．私は探検部活動がいそがしく，学生運動にはほとんど興味がなかった．

ニューギニアの遠征から帰った 1964 年は 2 回目の 2 回生だったが，その年に読んだエーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』によって，学生運動そのものを冷ややかに観るようになっていった．『自由からの逃走』は，第一次大戦後のドイツ国民がなぜナチズムに傾倒していったのかを社会心理学的に解説した本である．「自由からの逃走」というのは，地縁や血縁などの第一次のきずなによって縛られていた人間が，みずから統治能力を身につける前に，突然これら第一次のきずなから解放された場合に，どうしてよいか分からぬ精神的不安定に悩んだあげく，何か新しい外部の権威を求めて，自由を捨て去る現象のことである，と規定する．自由な思考がゆるされているのに，どうしてよいか分からないときに，何かの権威にすがる．これが「自由からの逃走」の本質である．現代でいえば，危険な宗教教団の教義への帰依などは，その典型にあたるのであろう．

教養部のクラス討議を通じて，いやおうなしに学生運動に巻き込まれていった同級生のなかに，「自由からの逃走」の実例を観る思いがしたのだった．高校時代は受験勉強ひとすじで，対人関係が複雑なクラブ活動にはいっさい加わらず，自己の世界の拡大だけをはかってきた新入生が，突然に“政治問題”に巻き込まれるのである．組織された学生運動に取り込まれ，1 年後には彼は民青の闘士に変貌していた．私には，彼は「自由からの逃走」をはたして民青に荷担した，と映った．ドイツ国民がナチズムに傾倒したのと同じ姿を彼に観る思いがした．私の学生運動への興味は，ますます遠のいていった．

5. 京都の地団研

1965 年 4 月に地鉱教室の学生となったが，日本に地学団体研究会（通称“地団研”）という組織があることも知らなかった．どのような会なのか知らなかったが，教室のほとんどの教官，学生が加盟しているとのことだったので，入会することにした．しかし，入学そうそう，ショックを受けることとなった．

4 月に，新入生歓迎会が開かれるというので，会場の飲み屋の二階に出かけた．新 3 回生以外に，新大学院生も招かれていた．教官では中沢圭二（教授）のほか，後にすぐ助教授となる助手も顔を見せていた．他にいたかも知れないが，記憶にない．信州大学から地鉱教室の大学院に入学した学生が，「松本支部から来ました」と挨拶したのには驚いた．京都大学が長野県松本市に支所を持っているわけでもあるまい．この挨拶を聞いてはじめて，この新入生歓迎会が教室主宰ではなく，地団研主催のものであることを知ったのである．私はこれは，地団研の公私混同だと思った．地鉱教室イコール地団研ではない．なのに，地鉱教室の新入生の歓迎会を，地団研が主催する．私は，不愉快な気持ちをいだくとともに，地団研は思い上がっている，と感じた．

さらに，地団研は日米科学反対の声明を出していた．政治団体の日本共産党が日米同盟に反対するのは当然だろうが，研究者が日米科学に反対してどうするのか．私は地団研の政治性に疑問を感じはじめていた．それでも夏ころまでは地団研の各種の集会にも顔を出していた．積極的に参加したのではなかったが，他に参加すべき行事がなかったことが最大の理由である．京都の地鉱教室には，地団研の他には組織は存在しなかった．地団研の活動に参加するか，あ

るいは個々ばらばらに散らばって活動するかの，どちらかであった．その意味では，組織力のある地団研の存在は，教室にとっては大きかったのである. 私と同期の65年新3回生のなかから，地団研活動にのめり込んでいく者もあらわれた. 同期の友人であったが,「自由から逃走」しているなと，彼の行動を冷ややかにながめていた.

そのころは，あらゆる授業は通年の授業であった. 中沢担当の地層学, 松下進の地史学は，平行して通年の授業として開講されるはずであった．1965 年の 9 月から，中沢は在外研究員としてニューヨークのアメリカ自然史博物館に半年間滞在することになっていた．そこで 65 年度の前半に地層学を，後半に地史学が集中的に講義されることとなった．中沢の出張にあたって，彼が主任を務める地層学講座の大学院生と教官が，9 月に飲み屋の二階で歓送会を開いている．腕相撲などをやり，そうとうに盛り上がっていたそうである．その大学院生のすべては地団研の会員で，そのうちの 2 名は，後に地団研の会長も務めている．地団研は，教室内にあっては日米科学反対を表明している．しかるに教授がアメリカに出張するにあたって，反対するどころか歓送会まで開いて，送り出しているのである．ご都合主義もいいところだと，私には映った.

そのころから私は地団研の組織として体質に，違和感を抱きはじめていた．あらためてフロムの『自由からの逃走』を読み返したことを覚えている．人は，どのようなプロセスを経て「自由から逃走」してしまうのか．フロムは次のように述べている:「新しい運動の帰依者になろうとするとき，個人は孤立的な感じがして，自分一人ではないかという恐怖にとらわれ勝ちであるが，かれは大衆集会ではじめてより大きな同志の集まりをみて，たいていのひとを力づけ勇気づけるものを受けとるのである．このような理由だけからでも，大衆集会は必要である．‥‥‥もし個人が自分の小さな仕事場や，自分を非常に小さなものに感じている大企業から，はじめて大衆集会に足を踏みいれ，同じ信念をもつ何千というひとびとのあいだに身をおくならば‥‥‥かれはわれわれが大衆暗示と呼ぶところのものの魔術的な影響に屈するのである」.

この文章の中の「新しい運動」を「地団研運動」,「大衆集会」を「地団研集会」と読み替えれば，自立していない若者がいかにして地団研に吸い寄せられていくかが，きわめてよく理解できる.

私はこの文章をフロムの著作『自由からの逃走』から引用したが，フロム自身はこれをアドルフ・ヒットラーの『我が闘争』から引用している. だからこの文章の出典は, かの有名なヒットラーの『我が闘争』だったのである．ヒットラーは, 大衆心理を的確に把握していた. では，地団研のばあいはどうか．地団研の組織者は井尻正二だが，大衆心理の理解はそうとうなものだったのであろう．その後井尻と接する機会は少なからずあったが, 私は好きになれなかった. 65 年の秋からは，私は地団研の会合に顔を出すのはやめにした.

明くる 1966 年 4 月に, 地団研京都支部が出している「そくほう」で，地鉱教室物理地質学講座の前中一晃が地団研を退会したことを知った. それを見て，私もやめようと考えた．地団研にとどまるべき積極的理由は，何もなかった．そして，退会手続きをとった.

6. 京都の地団研の勢力地図

京大の地鉱教室では地団研の力が強かったと

いわれるが，地団研のほかにはまとまった勢力が結集されていなかったから，「相対的」に地団研の力が目立ったのであった．学生運動の母体としては民青を支持する者が多くみられた．地団研の組織者の井尻正二が共産党の支持者であったことからわかるように，地団研活動に荷担する者は，ほとんどが民青支持者であった．

教養部時代に反民青の立場をとっていた者にとって，ほぼ地団研イコール民青という体質になじめないのは，当然であろう．しかし，繰り返すが，反地団研をまとめる勢力は京大の地鉱教室には存在しなかった．

私が卒業した 1967 年当時の京大地鉱教室の地団研の勢力地図は次のようになる．

第１表 京大地鉱教室教官層のなかの地団研の勢力図.

物理地質学講座（教官数 4）		
岩石学講座（教官数 4）	講師	
鉱物学講座（教官数 2）		助手
地層学講座（教官数 4）		助手
地史学講座（教官数 3）	助教授	助手

物理地質学講座は，岩石磁気学の先駆者の松山基範の影響もあってか，伝統的に地団研になびかない体質がつよい．地鉱教室のなかでは，プレート・テクトニクス理論をもっとも受け入れやすい体質をもつのは，この講座である．教官のなかで地団研に親近感を抱くひとは，誰も出ていない．学生も地団研とは距離をおいて活動していた．先にふれた前中は，この講座の大学院学生であった．

岩石学講座は，講師がばりばりの地団研の信奉者で，この講座の学生，大学院生は地団研活動に参画するのがふつうとなっている．

鉱物学講座は，数年前に教授候補と目されていた助教授が自動車事故を起こし，その後は教授ポストは空白のままとなっている．学生数は多くない．

地層学講座は，大学院生が地団研の会員となる例が多い．1967 年に助手に就任したばりばりの地団研の会員は，その後に地団研会長となる．

地史学講座では助教授と助手が地団研の会員である．しかし大学院生の半数ほどしか地団研には加わっていない．教授の亀井節夫は井尻正二の弟子で，地団研の有力な会員であるが，民青支持かというと，かならずしもそうとは思えない．その事情は下記に記す．上記の勢力図のなかには亀井の存在は書き加えていない．

このように，京大の地鉱教室では，教官総数 17 名のうち，地団研プロパーはせいぜい 5 名だったのである．だから，それほどつよい勢力をほこっていたのではない．地団研の他に組織はなく，地団研の声が高かったから，京大の地鉱教室は地団研に牛耳られていたように外部には映ったのであろう．

物理地質学講座の出身の西村進は，すでに大阪府立大学に奉職していた．1966 年に東京で開催された太平洋学術会議に出席していた西村から，太平洋から日本列島の下に向かって沈み込んでいるのは事実のようだ，だからマントル対流は実際に起こっているようやな，と聞かされた．そこでアーサー・ホームズの“Principles of Physical Geology”を読んで，マントル対流の実体の基礎勉強をはじめた．後にわかったことだが，物理地質学講座の大学院生にとっては，この書物は基礎勉強としての必読書のひとつだったそうである．

1965 年に出版された都城秋穂の『変成岩と変成帯』は話題の本だった．岩石学は専門ではなく，熱力学の基礎のない私には変成岩の成因論は理解できなかったが，対になる変成帯の存在

の意義についての都城の主張には感銘を受けた.

1965 年の暮れころから，地鉱教室の有志の大学院生を中心に「地球科学研究会」なるものが発足していた．66 年 3 月に東京大学理学部地質学鉱物学教室助教授の都城を講師に招いて，セミナーを開催した．また，同年には古地磁気学で新たな研究の地平を開拓しつつあった大阪大学基礎工学部教授の川井直人も招いてセミナーを開催している．この研究会は，プレート・テクトニクス理論を受け入れる京大地鉱教室の中心勢力となるはずであったが，その活動は 2 年ほどしか続かなかった.

このような活動があったことは，外部の泊の目にとまらなかったのは当然である．しかし，地鉱教室のなかにもプレート・テクトニクス理論を受け入れる素地は，じゅうぶんにできていたのである.

7. 哺乳類化石の研究を開始

1967 年 3 月に卒業論文を仕上げ，4 月から大学院修士課程に進学した. 進学するにあたって，地質学と人類学が融合できないかを真剣に考え，将来的に霊長類の古生物学的研究の方向に舵を取ることを念頭において，哺乳類の古生物学的分野の基礎勉強を開始することにした．京大で哺乳類の古生物学的研究といえば，亀井の地史学講座以外に候補地はない．そこで地史学講座に所属した．しかし，亀井研究室では，ゾウ化石の研究しかおこなえない. 当面の課題として，ステゴドンゾウを研究主題として与えられた.

理学部動物学教室の伊谷純一郎の研究室では，サル学のゼミナールを開講していた．そのゼミナールに参加させてもらい，ブュートゥナー・ヤヌッシュの“Origins of Man”の輪読会に加わった. このゼミナールで茂原信生と知り合い，その後は，茂原と共同して研究を継続してゆくこととなる．“Origins of Man”の第三紀初期の霊長類の進化の部分の紹介を私が担当した．日本からは第三紀の霊長類化石など，まったく出土しない．文献をなぞるだけの紹介のむなしさを痛感させられた．しかも参考にと参照したシンプソンの論文で，化石の霊長類と食虫類を区別する基準が私にはまったく理解できていないことに気付き, 暗澹たる気分におちいった. 2007 年に表した「日本の中生代哺乳類研究の動向」でふれたように，どの形態的特徴に着目してプレシアダピスが霊長類だと同定されるのか，私には理解できていなかった．さらに，哺乳類の臼歯の原型となるトリボスフェニック型臼歯の実体も理解できないことに，フラストレーションがつのりはじめていた.

亀井研究室では大阪層群のなかにおけるゾウ化石の産出層準を確定するなど，新たな研究手法による研究実績を積み重ねていた．ゾウ化石の研究は，京都大学のなかでも市民権を獲得しつつあった．しかし，霊長類の古生物学的研究にも対応できるほどの基盤は整備されていなかった.

1967 年 3 月に，亀井の紹介もあったので，東京教育大学で開催された化石研究会に出席した. 井尻の影響をもろに受けていたグループの研究会であった．ゾウ化石の臼歯の古生化学的研究や，エナメル質などの微細構造の研究が新しい研究手法としてもてはやされていた．それらの研究分野には，私はまったく興味はなかった. トリボスフェニック型臼歯の実体の理解の方が私にとってもっとも重要だといっても，それに同意するひとは東京教育大学のなかには誰もいなかった．同じ哺乳類の古生物学的研究といっても，その目指す方向はまったく別々であることを実感した.

その後，井尻や亀井が中心となって野尻湖のナウマンゾウの発掘調査が実施されていくが，私は野尻湖の調査にはいちども参加しなかった．

8. 東南アジア研究センターに就職

さきにふれた高谷好一は，1963 年に博士論文を仕上げ，明治建設工業に就職した．高谷は 1956 年に探検部が創設されたとき，人文研の吉田光邦が隊長のイラン学術調査隊に参加している．探検部の学生に吉田を紹介したのが人文研教授の岩村忍だった．岩村がアメリカのフォード財団の基金を引き出すことに成功し，京都大学に東南アジア研究センターが設置されることになり，岩村が初代の所長を務めていた．1965 年に高谷は明治建設工業を退社し，岩村を頼って東南アジア研究センターの研究生となった．1966 年から高谷は現地調査にタイに赴いた．

1967 年に部門増にともなって，高谷は東南アジア研究センターの助手に採用された．そこで高谷は思い切った手を打つ．文学部と農学部の教官がおもに研究担当教官となっていた東南アジア研究センターに理学部の地質学の分野を増強する手段として，大学院に進学したばかりの私を助手に採用しようと，画策をはじめた．東南アジア研究センターではさらに部門増が予定されており，高谷は助教授に昇進することになっていた．かつて私は東南アジア研究センターの事務補助のアルバイトをしており，私を知る関係者はけっこうおられた．とりたてて反対するひとはいなかったようだ．

私が大学院に進学してほどなく，6 月に高谷は東南アジア研究センターの助手になる気はないかと私に打診した．研究実績のまったくない私が助手に採用される可能性については半信半疑であったが，悪い話ではない．無縁の研究機関でもないので，ともかく応募書類は提出した．ほどなく，東南アジア研究センターの人事を決定する運営委員会が私の採用を議決したことを知らされた．

指導教官の亀井は，5 月から，今西錦司が主宰するアフリカ類人猿学術調査隊の調査に加わり，動物学教室の教授池田次郎，助手の葉山杉夫とともにタンザニアに滞在中であった．応募書類を提出したことも，亀井にはふせていた．助手として採用されることが決まった以上，だまっているわけにもいかない．そこで，タンザニアに滞在中の亀井に手紙を出して，高谷のすすめにしたがって応募書類を提出したこと，運営委員会が採用を決定したこと，私としては助手になりたいこと，ついては指導教官として賛同していただきたいこと，帰国後に亀井教授みずから東南アジア研究センターに挨拶に赴いていただきたいことなどを，要望した．

地団研が反対している日米科学の象徴のような東南アジア研究センターに，こともあろうに自分の学生が就職しようというのである．はたして亀井はどう対応するか．1966 年 3 月に定年退官する地史学講座の松下進の後任ふくみで，信州大学の亀井が助教授として赴任してきていた．松下の後任に，亀井は 1967 年に教授に就任していた．同年に，助手が助教授に昇進していた．その助教授はばりばりの地団研の会員であった．私は自分の行動は，いっさいその助教授には伝えていなかった．信用ならない人物と私には映っていたからである．

亀井は，アフリカからすぐに返事をよこした．東南アジア研究センターへの就職を全面的に支援するとあった．そして，助教授にもすべてを話し，指導を仰ぐようにと，述べられていた．亀井は，助教授の立場を思いやったのであろう．私は亀井の手紙をありがたいと感じつつも，助

教授にはいっさいの連絡をとらなかった.

亀井は，私に返書を出すと同時に，助教授にも，もうひとりの地団研の会員でもある助手にも，私の東南アジア研究センター助手就任の件を知らせたのであろう．地鉱教室の地団研のメンバーから，私への敵意があからさまに表明された．面と向かって東南アジア研究センターへの就職に反対すると敵意を表したのは，地史学講座の助手であった．助手レベルの教官が新入直後の大学院生に攻撃をしかけると，けっこう効果がある．他でもめったに見られる状況ではないので，しっかりと見届け，心に刻みつけることとした．他は，村八分のように，無視の態度であった.

アフリカから帰国した亀井は，すぐに東南アジア研究センターに出向いて挨拶をしてくれた. 私の助手採用の決定の礼を述べてくれた．私の東南アジア研究センター助手の就任は，1967 年 12 月 16 日に発令された．20 日に，地史学講座の年内最終のセミナーが開かれた. セミナー後，私の就職祝いを兼ねてコンパをしようと亀井は発案した．セミナーに出席していた助教授と助手，地団研の会員の大学院生は，コンパへの参加を拒否した．地団研の会員としては，私の就職祝いのコンパへの参加拒否は正しい行動なのである．日米科学に反対する地団研の大学院生がアメリカに出張する教授の歓送会を挙行する方が，おかしい行動である．地史学講座の地団研の教官，大学院生は筋の通った行動をえらんだと思った.

私がもっとも神経をとがらしたのは，図書室の利用に関することであった．しかし実質的な制限は，何も加えられなかった．地鉱教室の図書係の司書は，後に職員組合の委員長を歴任する民青プロパーの存在だったが，政治的に対立する相手にも，対等の立場で対処してくれた. この司書の態度には，いまも感謝している.

1968 年ころからはげしくなった大学紛争当時は，すでに私は東南アジア研究センターに就職していたので，地鉱教室の学生の動向はくわしくは知らない．いわゆる全学連も，日本共産党の直接の指導を受ける民青と，共産党の指導を嫌うグループとは深刻に対立するようになっていた．共産党の指導を嫌うグループは四分五裂をくり返し，いわゆる三派系に収斂されてゆく．大学の現状に悲観的ではあるが学生運動に荷担しない学生は多く，むしろ三派系全学連の主張に賛同する傾向が見られた.「心情三派」なるコピーがはやったのもこのころである. 私も，どちらかといえば，その心情三派の部類に属する存在であった．地鉱教室にも心情三派の学生は多く見られたが，まとまって行動することはなく，まとまって行動する地団研に対抗するほどの勢力には育たなかった.

9. 北海道のナウマンゾウ

1969 年に，十勝団体研究会の調査の折りに，帯広市近郊の忠類村からナウマンゾウの化石が発見された．この調査に参加していた京大地鉱教室の地層学講座の助教授石田志朗は，その化石がマンモスゾウではなく，ナウマンゾウのものであることを確認していた．石田はマンモスゾウとナウマンゾウの臼歯の区別のポイントを，亀井から教示されていたから，すぐに判別できたのだという．それまでナウマンゾウは本州以南からしか発見されておらず，北海道からはじめて発見されたこともあって，注目を集めた.

北海道開拓百年記念事業が北海道庁で計画されており，忠類村のナウマンゾウの発掘はその記念事業の一環としておこなわれることになった．1969 年の 10 月に予備調査，1970 年の 6 月

に本調査が実施された．ナウマンゾウの権威として亀井がそれらの調査の指揮をとった．私も亀井の補佐として，それらの調査に参加した．京大動物学教室の自然人類学講座の茂原も哺乳類化石の研究になみなみならぬ関心をいだいていたので，本調査に参加を申しでてきた．

調査現場の指揮は，地団研が中心となって，とりおこなった．東京教育大学のゾウ化石の研究グループも加わってきた．井尻も招かれて，参加してきた. 井尻は, さながら天皇であった．発掘そのものは大成功だったし，参加者もそれぞれの立場で満足するものであったと思われる．しかし，亀井がマスコミへの発表のなかで，ナウマンゾウは北方系の動物だ，と強調することへの違和感はぬぐいされないものとなっていった．中国大陸に分布するゾウ類の整理をきちんとし，それとの対応を明確にしないと，それまで南方系とみなされてきたナウマンゾウを北方系とする論拠などどこに存在するのか，という疑問はふくらむばかりであった．私は，忠類村のゾウ化石の発掘調査に参加したことを，ばかばかしく思うようになっていった．

私は，1970 年の 8 月から，カンザス大学の大学院修士課程に入学した．このときには，ゾウ化石の研究に対する興味は，かんぜんに失われていた．私はそのとき，28 才．

10.　トリボスフェニック型臼歯の実体

カンザス大学での私の指導教官は，クレイグ・C・ブラック準教授であった．私より 10 才年長の 38 才. カーネギー自然史博物館のキュレーターから，1970 年 1 月にカンザス大学に赴任してきたばかりであった．カンザス大学のように歴史のある大学は古い体質が根付いており，新進気鋭には抵抗が多すぎたのであろう．ブラックは求めに応じて 1972 年 6 月に, テキサス工科大学の新設の博物館長兼地球科学科教授として転出することになった．カンザス大学の 5 名の大学院生がテキサス工科大学に転籍した．私もそのひとりである．アメリカでは，プレート・テクトニクス理論は自明の理としてあつかわれ，反対する理論は皆無であった．ただし，カンザス大学の大御所のクルト・タイカートのように，無視することで受け入れを拒否する研究者もいたようだが，反対理論は聞くことはできなかった．私は，当然のようにプレート・テクトニクス理論を受け入れた．アメリカ滞在が長期におよぶことになったので，東南アジア研究センターは退職した．1973 年 5 月に修士号を取得し, 75 年 12 月に博士課程を単位取得退学, 76 年 1 月に京大霊長類研究所（通称“霊長研”）の助手となり，1977 年 12 月に博士号を取得した．

ブラックの「高等脊椎動物の古生物学」は名講義であった．私はこの講義を 4 回にわたって聴講した．単位取得のための正規の学生として 1 回，他の 3 回はたんなる聴講である．中生代哺乳類の進化の過程で，どのようにしてトリボスフェニック型臼歯が完成して，白亜紀の有袋類と食虫類の臼歯型が形成されるかが，きわめてよく理解できた．さらにこのトリボスフェニック型臼歯が再編成されて霊長類，さらにはゲッ歯類などの哺乳類の臼歯の型が派生するのだが，それらの実体が明確に理解できたのだった．1967 年に伊谷のセミナーで受けたショックは，このようにして解消されていった．

修士号を取得して，私は一時帰国した．トリボスフェニック型臼歯の実体について日本で紹介記事が書かれた実例はないので，論文の形式にまとめて原稿を仕上げた．伊谷研究室の大学院生の掛谷誠に相談したところ，伊谷にとりつ

いでくれた．私として当時刊行されていた「科学朝日」にでも掲載されればありがたいと考えていた．伊谷は私の原稿を読んで，当時編集が進行中の『今西錦司博士古希記念論文集』へ投稿するよう薦めてくれた．伊谷は編集委員のひとりであった．私は原稿を，記念論文集の出版元の中央公論社に送った．この論文集の出版は遅れて，1977 年になって出版された．

この論文は，霊長類の古生物学的研究を日本においても根付かせ得る可能性をしめすものと受け止められたのであろう．1975 年に京大霊長研に新設された系統研究部門の助手に応募したところ，採用された．1976 年 1 月に赴任した．私はその後，ゾウ化石の研究にはいっさいかかわらず, 地団研とは没交渉のまま, 現在にいたっている．霊長研に在任中は南米のコロンビアで霊長類化石の探索の調査を継続させた．この活動によって，探検部の学生としていだいていた海外での活動の夢を実現させることができたのだった．

11.　京大地鉱教室の地団研の現在

第 1 表にしめした地団研の教官群のその後を紹介しておこう．岩石学講座の講師は，その後昇進することなく講師のままで定年退職した．鉱物学講座の助手は，その後講師に昇進し，定年近くになって助教授に昇進したが，助教授で定年退職した．地層学講座の助手は，島根大学助教授に昇進して京都を離れた．後に地団研の会長となる．島根大学教授となり，定年退職した．地史学講座の助教授は，その後教授となって定年退職したが，助手は講師に昇進したままで定年を迎えた．

私は霊長研で助教授となった後，1993 年に京大地鉱教室の地史学講座の教授として赴任した．地団研と対立していた私の採用に反対できなかったところに，京大地鉱の地団研の力の衰えが見て取れる．第 1 表の地史学講座の助教授は教授となった後，すでに退官していた．助手は講師に昇進していたが，1995 年に定年を迎えた．かつては私が東南アジア研究センターに就職するときに面と向かって毒づいた人物である．彼の定年退職記念パーティーは私が主宰して執り行った．

このように, 京大地鉱の地団研のメンバーは, 研究面ではそれほどの足跡は残していない．残しておれば，教授としてはなばなしく研究を展開していたはずだったからである．

結論として，泊が著書のなかで述べているほどには，京大地鉱教室の地団研の勢力というのは，実質的に強くはなかったのである．現在, 京大地鉱教室には，地団研のメンバーは皆無である．

12.　結びに換えて

泊の著作が出版されて，多くの人が目を通した．京大の地鉱教室を地団研にまとめてしまう表現には, 同意できないと感じる人も多かった．そこで，京大地鉱の卒業生で，地団研の活動とは距離を置いていた友人に集まってもらって，意見を聞いた．京都造形芸術大学教授の原田憲一，京大大学院理学研究科地球熱学研究施設教授竹村恵二，同志社大学工学部教授林田明の諸氏である. それぞれの立場からの活動があって, きわめて多様であることがわかり，すべてをまとめることは不可能と判断した．本稿では，私の立場から執筆することとした. 諒とされたい．

参考文献

Buettner-Janusch, J. (1967) : Origins of Man:

Physical Anthropology. John Wiley & Sons, New York, 674p.
フロム，Ｅ．（1951）:「自由からの逃走」（日高六郎訳），創元新社，東京.
Holmes, A. (1965) : Principles of Physical Geology. Ronald Press, Co., New York, 1288p.
本多勝一・藤木高嶺（1964）:「ニューギニア高地人」，朝日新聞社，東京.
都城秋穂（1965）:「変成岩と変成帯」, 岩波書店，東京.
瀬戸口烈司（1977）: 中生代哺乳類の進化と霊長類の進化.『形質・進化・霊長類』（加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編），中央公論社，東京：99 - 133.
瀬戸口烈司（2007）: 日本の中生代哺乳類研究の動向．財団法人深田地質研究所年報，No. 8 ：51 - 63.
竹内均・上田誠也（1964）:「地球の科学」，日本放送出版協会，東京.
泊次郎（2008）:「プレートテクトニクスの拒絶と受容ー戦後日本の地球科学史」, 東京大学出版会，東京.